

2. 患者発生状況

2. 1 概要

2. 1. 1 全数把握対象疾病

表 4 に全数把握対象疾病の年間患者数を示す。2016 年は、一類感染症は報告がなく、二類感染症は結核 1,158 人であった。患者数の多い疾病は、三類感染症では腸管出血性大腸菌感染症 129 人、四類感染症ではレジオネラ症 71 人、五類感染症ではアメーバ赤痢 48 人、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 75 人、急性脳炎 52 人、侵襲性肺炎球菌感染症 142 人、梅毒 184 人であった。

2015 年と比較すると、2016 年は急性脳炎、梅毒、麻しん等の患者数が増加した。急性脳炎患者の半数以上は病原体不明と報告されているが、2016 年はインフルエンザウイルスが原因と推定される患者が 13 人報告され、新型インフルエンザが流行した 2009 年の 7 人を超えて、過去 10 年間で最大となった。梅毒は、2 年連続して前年度の 2 倍以上に増加し、20～40 歳代男性と 20～30 歳代女性の異性間性的接触が主要な感染原因と考えられた。全国的にも、患者数の急増が見られ、厚生労働省や性感染症学会が梅毒の流行に関する注意喚起を促しているが、増加傾向が継続している。麻しんは、わが国に土着のウイルス（遺伝子型 D5）による伝搬がないことを確認し、2015 年 3 月に排除状態にあることが認定されたが、2016 年は海外渡航歴のある人を発端とする国内感染が発生し、遺伝子型 H1 及び D8 のウイルスが検出された。

蚊媒介性感染症のうち、デング熱の患者数は過去 10 年間で最大となったが、東南アジアを中心にすべて海外での感染と報告され、県内での 2 次感染は見られなかった。また、ダニ媒介感染症では、つつが虫病及び日本紅斑熱の患者数が増加し、県内での感染地域の拡大が見られた。

2. 1. 2 定点把握対象疾病

表 5 に週報疾病別年間患者数を、表 6 に月報疾病別年間患者数を示す。

週報対象疾病のうち、インフルエンザ定点及び小児科定点対象疾病で 2016 年の患者数が多い疾病は、インフルエンザ 66,751 人、感染性胃腸炎 53,815 人、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎 9,984 人、流行性耳下腺炎 7,799 人、の順であった。2015 年と比較すると、流行性耳下腺炎 [2,624 人→7,799 人]、インフルエンザ [43,699 人→66,751 人]、及びヘルパンギーナ [2,883 人→4,276 人] は患者数が増加し、手足口病 [18,344 人→1,475 人]、伝染性紅斑 [2,867 人→1,723 人]、及び A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎 [13,444 人→9,984 人] は患者数が減少した。眼科定点対象疾病では、流行性角結膜炎の患者数が [1,473 人→706 人] と減少した。基幹定点対象疾病では、マイコプラズマ肺炎 [191 人→508 人] と感染性胃腸炎（病原体がロタウイルスであるものに限る。） [94 人→200 人] の患者数が増加した。

月報対象疾病のうち性感染症では、淋菌感染症の患者数が 2 年続けて減少した。薬剤耐性菌感染症では、顕著な変動はみられなかった。

表4 全数把握対象疾病の年間患者数（届出のあった疾病）

（2017年10月30日現在の当情報センターにおける把握）

	疾 病 名	2014年患者数	2015年患者数	2016年患者数
二類	結核	1,312	1,215	1,158
三類	コレラ	0	1	0
	細菌性赤痢	4	3	5
	腸管出血性大腸菌感染症	114	103	129
	腸チフス	1	2	0
	パラチフス	0	3	0
四類	E型肝炎	3	6	3
	A型肝炎	25	11	8
	チクングニア熱	0	1	0
	つつが虫病	3	5	9
	デング熱	7	9	16
	日本紅斑熱	11	9	13
	日本脳炎	1	0	0
	マラリア	2	0	0
	野兔病	1	0	0
	レジオネラ症	50	63	71
	レプトスピラ症	0	1	0
五類	アメーバ赤痢	44	44	48
	ウイルス性肝炎 ^{*A}	11	21	16
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 ^{*1}	12	75	75
	急性脳炎 ^{*B}	16	18	52
	クロイツフェルト・ヤコブ病	5	7	10
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	12	17	27
	後天性免疫不全症候群	35	28	34
	ジアルジア症	3	2	2
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	13	11	17
	侵襲性髄膜炎菌感染症	2	1	3
	侵襲性肺炎球菌感染症	98	108	142
	水痘（入院例） ^{*1}	7	13	9
	先天性風しん症候群	1	0	0
	梅毒	42	89	184
	播種性クリプトコックス症 ^{*1}	1	2	3
	破傷風	1	3	0
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	3	0	0
	風しん	7	5	9
	麻しん	19	4	20

^{*A}E型肝炎及びA型肝炎を除く。^{*B}ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く。

^{*1}2014年9月19日より追加。

表5 疾病別年間患者数（週報）

疾 病 名	2014年		2015年		2016年	
	患者数	定点あたり	患者数	定点あたり	患者数	定点あたり
インフルエンザ ^{*A}	63,157	319.58	43,699	219.72	66,751	335.48
RSウイルス感染症	4,078	31.86	5,112	39.64	4,068	31.53
咽頭結膜熱	2,975	23.16	3,402	26.42	3,023	23.42
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	8,320	64.88	13,444	104.38	9,984	77.33
感染性胃腸炎	49,331	384.75	49,328	382.97	53,815	416.92
水痘	6,713	52.37	3,258	25.29	2,903	22.49
手足口病	1,623	12.63	18,344	142.42	1,475	11.43
伝染性紅斑	665	5.18	2,867	22.26	1,723	13.35
突発性発しん	3,350	26.11	3,040	23.60	2,680	20.76
百日咳	72	0.56	132	1.02	102	0.79
ヘルパンギーナ	5,899	45.75	2,883	22.36	4,276	33.16
流行性耳下腺炎	1,179	9.19	2,624	20.36	7,799	60.43
急性出血性結膜炎	11	0.31	19	0.54	15	0.43
流行性角結膜炎	1,283	36.66	1,473	42.09	706	20.20
細菌性髄膜炎 ^{*B}	32	2.47	18	1.29	33	2.36
無菌性髄膜炎	29	2.23	42	3.01	50	3.57
マイコプラズマ肺炎	86	6.69	191	13.67	508	36.29
クラミジア肺炎(オウム病を除く)	0	0.00	1	0.07	1	0.07
感染性胃腸炎(病原体がロタウイルス)	81	6.33	94	6.71	200	14.29

^{*A}鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く。^{*B}インフルエンザ菌、髄膜炎菌、肺炎球菌を原因として同定された場合を除く。

表6 疾病別年間患者数（月報）

疾 病 名	2014年		2015年		2016年	
	患者数	定点あたり	患者数	定点あたり	患者数	定点あたり
性器クラミジア感染症	873	18.98	880	19.13	862	18.74
性器ヘルペスウイルス感染症	317	6.89	303	6.59	310	6.74
尖圭コンジローマ	144	3.13	185	4.02	171	3.72
淋菌感染症	374	8.13	348	7.57	297	6.46
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	525	37.50	408	29.14	451	32.21
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	75	5.36	69	4.93	71	5.07
薬剤耐性緑膿菌感染症	10	0.71	4	0.29	9	0.64
薬剤耐性アシネトバクター感染症 ^{*1}	2	0.14	—	—	—	—

^{*1}2014年9月19日より全数把握対象疾病に変更。

2. 2 結核、腸管出血性大腸菌感染症、侵襲性肺炎球菌感染症、梅毒及び定点把握対象疾病の動向

2016年の感染症発生動向調査事業における週報及び月報の患者情報を解析し、週（月）別患者数、保健所別患者数、及び年齢階級別患者数を求めた。STD対象疾病では性別・年齢階級別患者数を求めた。これらの統計表は付表として本誌54～66ページに掲載した。

全数把握対象疾病のうち患者数の多い結核、腸管出血性大腸菌感染症、侵襲性肺炎球菌感染症、梅毒及び定点把握対象疾病について、各疾病の動向を以下に示す。

(1) 結核

結核の年間患者数は1,158人で、昨年の1,215人より減少した。2010～2013年は年間1,500人前後で推移していたが、2014年以降は、やや減少傾向を示している。性別分布は男性665人、女性493人であった。

年齢階級別患者発生割合は10歳未満3%、10歳代1%、20歳代5%、30歳代6%、40歳代10%、50歳代10%、60歳代13%、70歳代20%、80歳代26%、90歳以上7%と、70歳以上の高齢者が全体の53%を占めていた。

病型別では、肺結核が569人(49%)、肺結核及びその他の結核が52人(4%)、その他の結核が250人(22%)、無症状病原体保有者が286人(25%)、疑似症患者が1人であった。

図 3-1 結核の患者発生状況

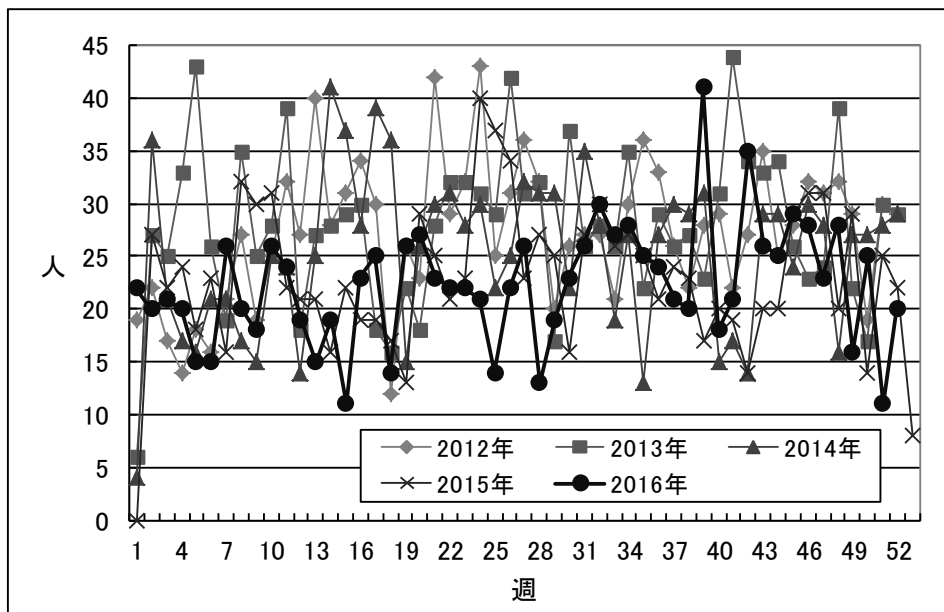
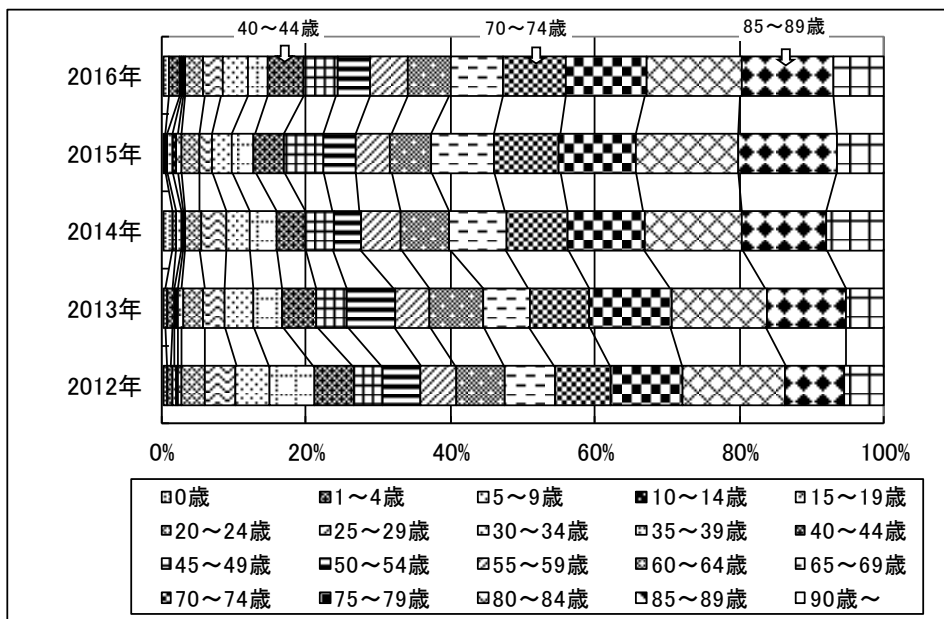


図 3-2 結核の年齢階級別患者発生割合



(2) 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の年間患者数は129人で、昨年の103人より増加した。27週（7月上旬）から35週（9月上旬）までが患者発生の多い時期となっていた。性別分布は男性58人、女性71人であった。30～31週（7月下旬から8月上旬）には、保育施設での感染に関連する患者が35人報告された。

年齢階級別患者発生割合は10歳未満43%、10歳代7%、20歳代13%、30歳代16%、40歳代7%、50歳代4%、60歳代6%、70歳以上5%であった。

有症者は86人で、うち2人が溶血性尿毒症症候群を発症し、無症状病原体保有者は43人であった。O血清型別では、O157が83人、O26が39人の順で多くなった。

図4-1 腸管出血性大腸菌感染症の患者発生状況

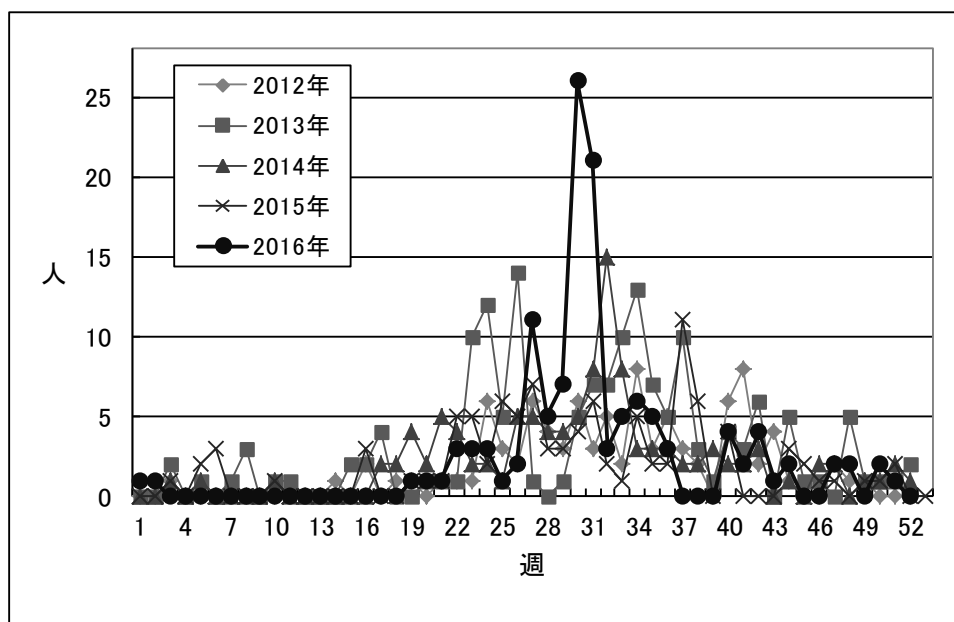
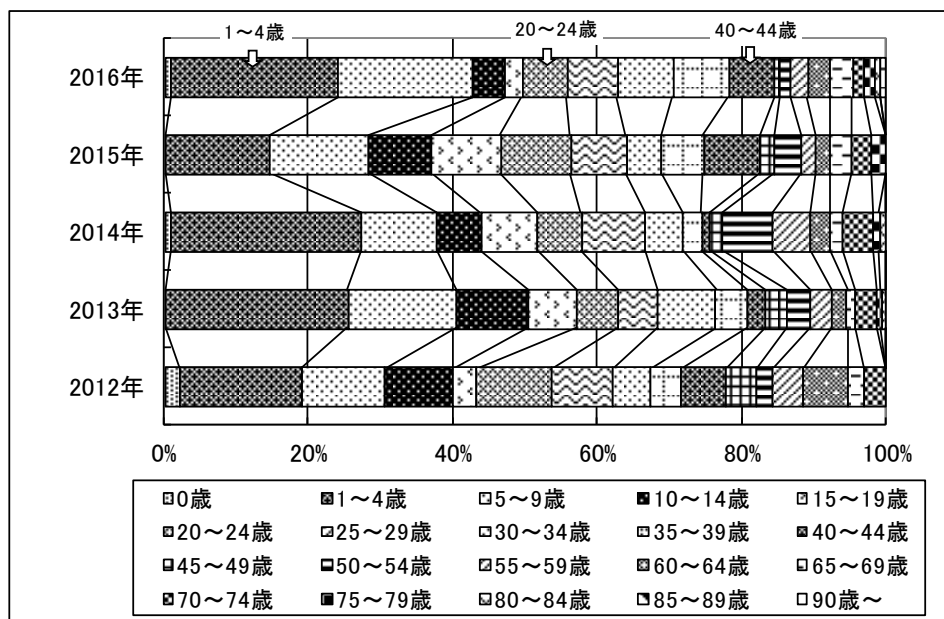


図4-2 腸管出血性大腸菌感染症の年齢階級別患者発生割合



(3) 侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症の年間患者数は142人で、昨年の108人より増加した。性別分布は男性82人、女性60人であった。本疾病は、2013年4月1日より全数把握対象疾病に追加され、冬から初夏にかけて患者発生が増加する傾向が見られる。

年齢階級別患者発生割合は10歳未満29%、10歳代1%、20歳代1%、30歳代3%、40歳代4%、50歳代5%、60歳代18%、70歳代18%、80歳代17%、90歳以上4%となり、4歳以下の乳幼児と65歳以上の高齢者として全体の75%を占めていた。

4歳以下の患者33人中31人はワクチン接種をしていたが、65歳以上の患者74人中、ワクチン接種有りは8人、接種無しが29人、不明が37人であった。

図 5-1 侵襲性肺炎球菌感染症の患者発生状況

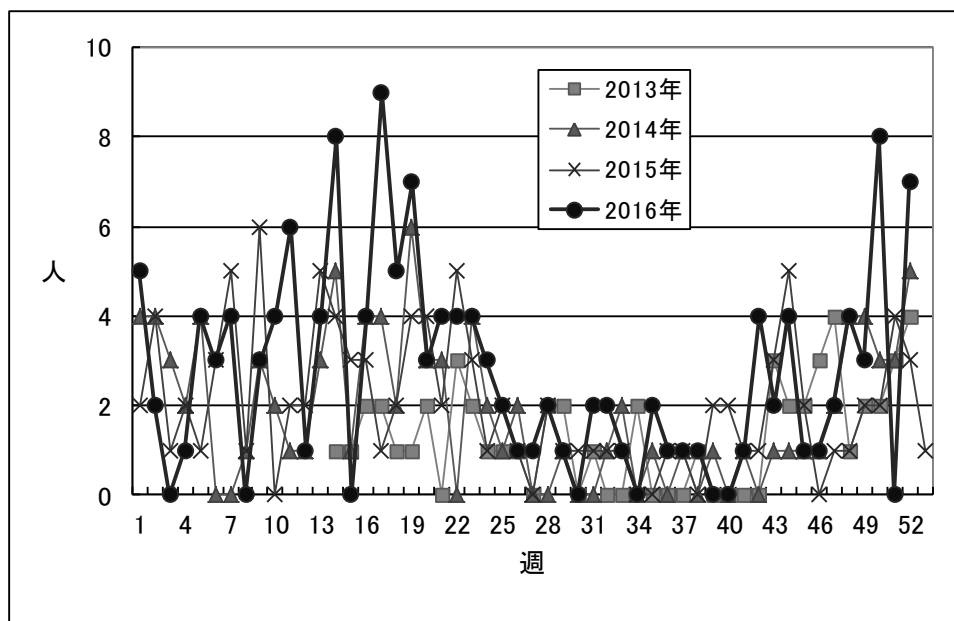
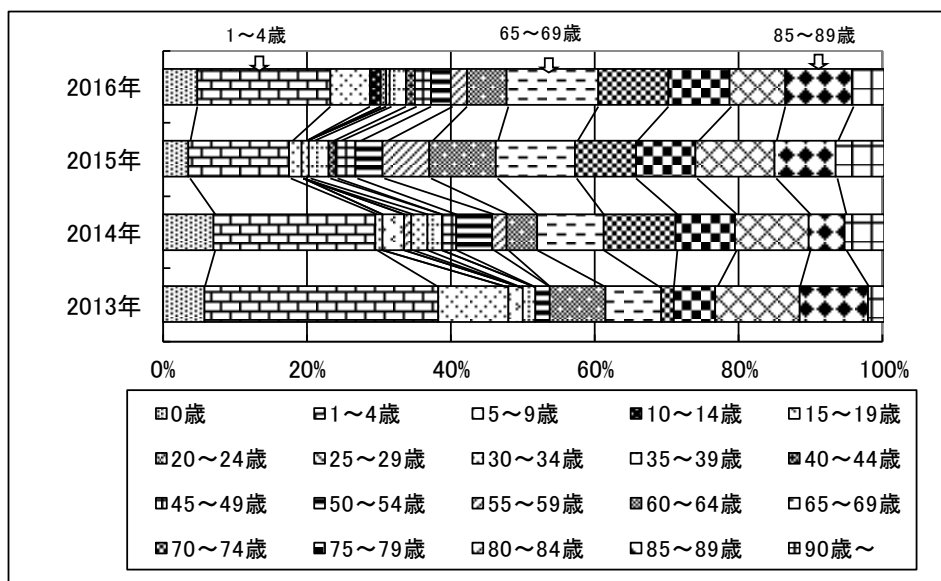


図 5-2 侵襲性肺炎球菌感染症の年齢階級別患者発生割合



(4) 梅毒

梅毒の年間患者数は184人で、昨年の89人より2倍以上増加した。特に、若い女性患者の増加が著しく、性別分布は男性143人、女性41人となった。

年齢階級別患者発生割合は10歳未満1%、10歳代3%、20歳代28%、30歳代22%、40歳代22%、50歳代14%、60歳代5%、70歳代3%、80歳以上2%となり、20～40歳代の患者数が多くなっている。

感染原因として、9割が性的接触を報告しており、母子感染による先天梅毒が1例あった。

図 6-1 梅毒の患者発生状況

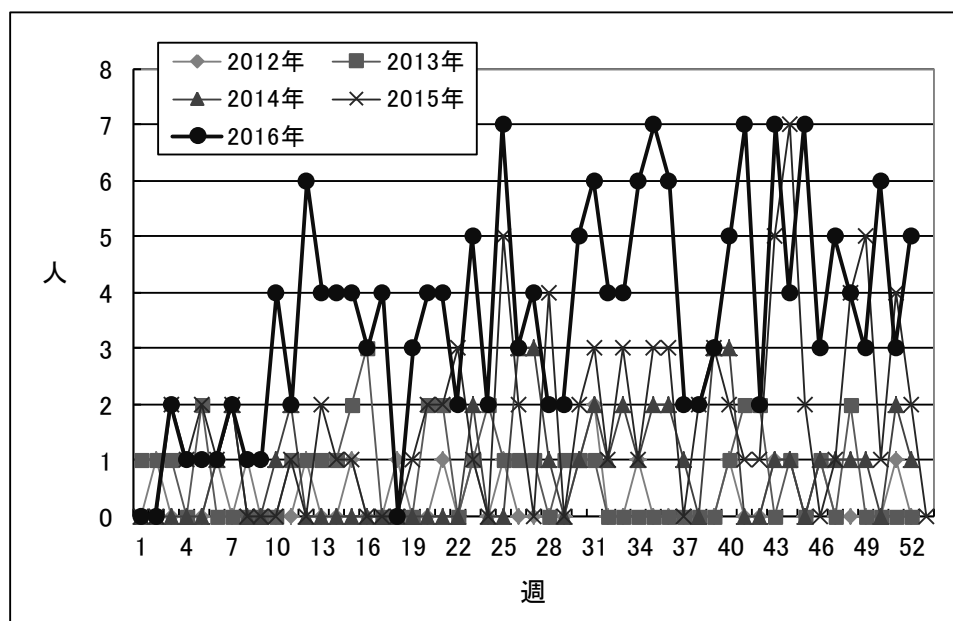


図 6-2 梅毒の年齢階級別患者発生割合

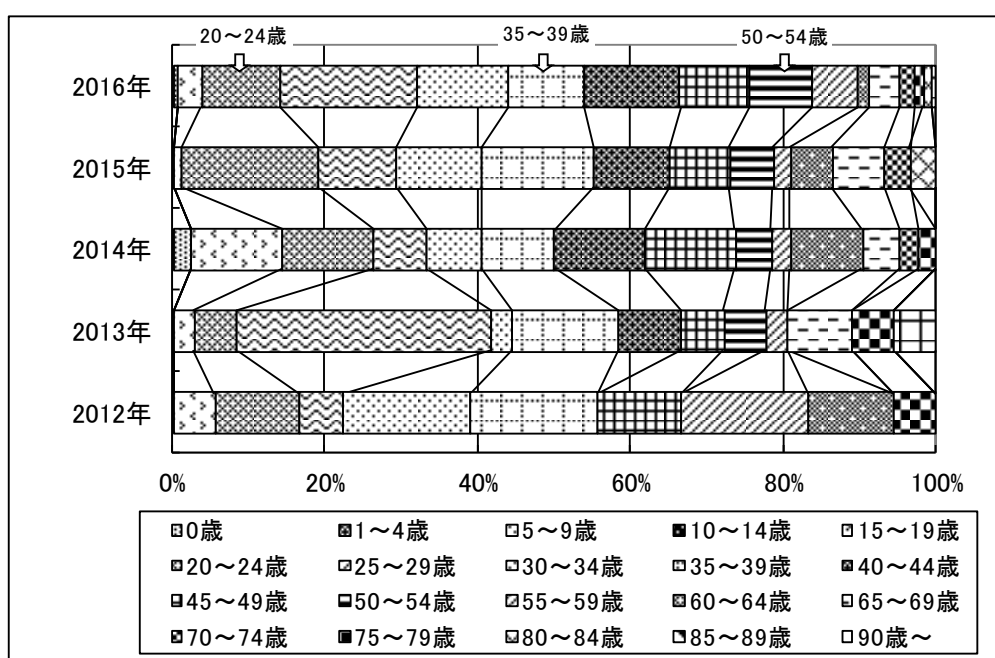


図 6-3 梅毒の年齢階級別患者発生状況（男性）

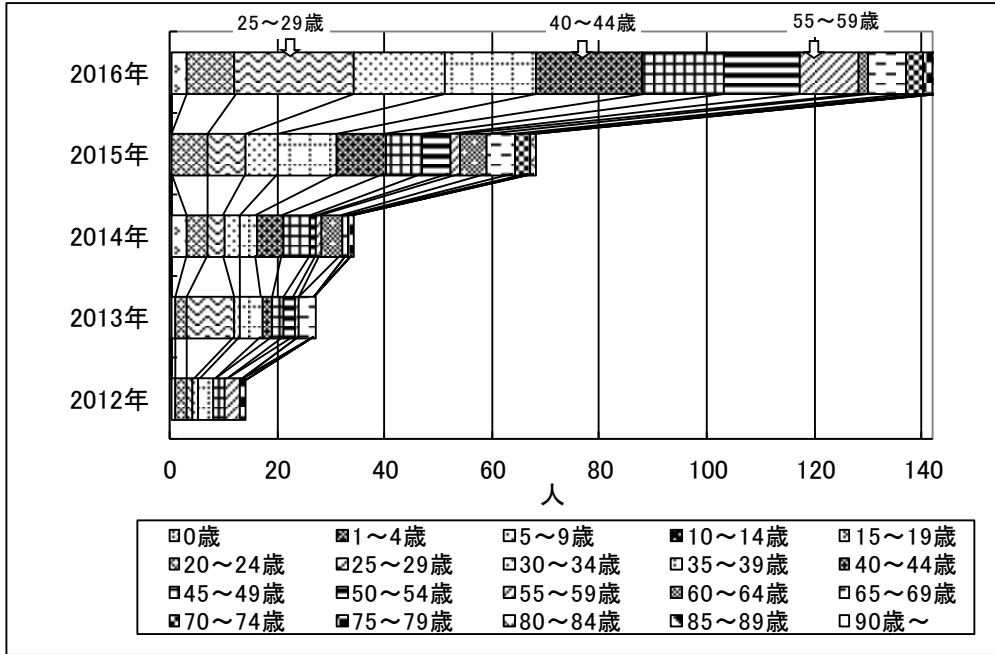


図 6-4 梅毒の年齢階級別患者発生状況（女性）

